

「絵をかく話」

1

図工の時間がやってきた。先生が白い画用紙をくばっているから、きつとこれから絵をかくんだ。口には出さないけれど、ぼくは心の中でちよつとこままっている。なぜかって、ぼくは絵をかくときはいつもどうやっていいかわからなくなってしまうんだ。何にもまよわないでスラスラ絵がかける人はいいよな。ぼくはそうはいかないよ。

白い画用紙を見つめながら、ぼくはちよつぱりためいきをついた。すると、ふしぎなことがおこった。白い画用紙の中からぼんやりとヘンテコなおじさんがうき出してきたのだ。何がヘンテコかって、見たこともないふくをきているし、はなの下からのびているひげがミミズのようにウネウネと動いているじゃないか。だいたい、画用紙の中からうき出てくるなんてあやしすぎる。

「絵がかけなくてこままっているのじゃね。」
ぼくは、びっくりした。そのヘンテコなおじさんが話しかけてきたからだ。

「なんでわかるの？」

「あんただれ？」

ふしぎなことがいつべんにおこったので、ぼくは何を言っているかわからなくなつて、頭にうかんだことをじゅん番に口に出していた。

「さつき、きみはためいきをついたじゃ。あれは、カケズノタメイキといつて絵がかけなくてこまつた時に出るのじゃ。」
ヘンテコなおじさんは、ウネウネひげをさわりながら話をつづけた。

「カケズノタメイキはわしをよぶあいつとなつてゐる。それから、わしがだれかということを知りたく話すと百万時間かかるのでかんとんにせつ明する。わしは絵の中にすむ絵の中あんない人のヨンダラ・カイトラというものじゃ。」

ともかく、ヘンテコなおじさんのとう場でヘンテコなことになつてきた。このヨンダラ・カイトラとかいうおじさんには、どう

やらぼくの心の中がお見通しらしい。

「心ばいするな。きみは絵がかけないんじゃない。心の中にある絵の中せかいがかくれて見えないだけじゃ。絵の中せかいは、ペチャクチャピクチャライドにのれば、かんとんに見に行くことができる。」

さつきから、このおじさんの話にはわけのわからない名前がとび出してくる。

「ペチャクチャピクチャライドって何だよ。」

「ペチャクチャピクチャライドはじゃな、ユメミルチカラを動力として動くのりものじゃ。全体にチヨロケツタ色をしていて、ウニヤスポツチもようがある。絵の中せかいの音声ガイドつき、どう体にはフアンタジースタピライザーが、そうびされていて……。」

ますますわけのわからないことを言い出すので、ぼくはヨンダラ・カイトラの話の中ですつもんをした。

「それで、どうやったらそのペチャクチャピクチャライドになれるの。」

「それはまず、きみがペチャクチャピクチャライドを絵にかいてみることにじゃ。」

ぼくは、ぼかんとした。

「だ、だつて、ぼくはペチャクチャピクチャライドなんて見たこともないし、チヨロケツタ色も、ウニヤスポツチもようだつてどんなものがまつたく知らないんだよ。」

「ペチャクチャピクチャライドは、きみが船のようなたちだと思えばそうだし、たまごがたのパスのようだと思えばそうなんじゃ。チヨロケツタ色も、ウニヤスポツチもようも、きみがかつてに思いついて絵にしたものが正かいなんじゃ。こまかいそうびをとりつけてもかまわない。ただ、きみがのるペチャクチャピクチャライドはきみがつくり出さないと動かないのじゃよ。」

ヨンダラ・カイトラはあたりまえのように言った。

「さあ、きみのペチャクチャピクチャライドを絵にしてごらん。」

ぼくは、やっぱり少しこまつたけれどヨンダラ・カイトラの言

うとおりに、ぼくのペチャクチャピクチャライドをつくり出すために画用紙にむかつて絵をかきはじめた。

2

「なんだかカッコわるい気がするなあ。ぼくのつくったペチャクチャピクチャライド……」

ぼくは、半分本気でカッコわるいと思ったけれど、のこりの半分では、自分で生み出したペチャクチャピクチャライドをちよつとじまんしたい気分もあつた。

「どんなにかッコわるいペチャクチャピクチャライドでも、自分で生み出したのならちゃんと動いて絵の中せかいに行くことが出来る。さあ、のりなさい。」

ヨンダラ・カイトラはかんとんに言ったけど、絵にかいたのりものにのれるはずないじゃないかと、ぼくが言いかけた。すると、ヨンダラ・カイトラはぼくの言いたいことは、はじめから知っていたように言った。

「まだわからないのじゃな。絵の中せかいに行きたいなら、自分も絵になればいいんじゃないよ。そういう絵を、自画ぞうという。自画ぞうをかいてペチャクチャピクチャライドにのりこむんじゃない。」

ぼくは、ペチャクチャピクチャライドの大きさにあわせて自画ぞうをかきだした。

3

「さあて、ここから絵の中あんない人のほんとのしごとじゃ。じつは、絵の中せかいにはむげんにある。かぞえきれないほどあるということじゃ。」

ヨンダラ・カイトラはぼくのペチャクチャピクチャライドのあんないせつていというダイヤルをたしかめている。

「きみは、ペチャクチャピクチャライドのしょしん者なので、行き先を自動せつていにしたところ、今日の行き先は『トンデモせかい』にきまつたぞ。」

「トンデモせかいってどういうせかいなのさ。」
ぼくが、聞きかえたことにこたえたのはヨンダラ・カイトラではなくて、何とぼくが生み出したペチャクチャピクチャライドだった。

「トンデモセカイトハ、フダンノクラシノナカデハ、アリエナイコトガ、ナンデモ オキテシマウセカイデス。ソウゾウガ、カタチャ、イロニナツテ アラワレルセカイデス。」

いつの間にか、ペチャクチャピクチャライドは動き出している。
「ペチャクチャピクチャライドはほんとうにペチャクチャしゃべるんだなあ。」

ぼくが一人ごとを言うと、ヨンダラ・カイトラがよこから話しかけてきた。

「このペチャクチャピクチャライドは、きみが生み出したんじゃない。だから、ペチャクチャピクチャライドの声は、ほんとはきみの心の声なんじゃよ。」

「ええつ。」
ヨンダラ・カイトラの話におどろいている間もなく、ペチャクチャピクチャライドのもくてき地とうちやくを知らせる声がひびいた。

「トンデモセカイ。トンデモセカイデゴザイマス。エノナカダケノ、トンデモセカイヘヨウコソ。」

ぼくは、ペチャクチャピクチャライドから外のようなすを見ておどろいた。

「うわー。十二色のにじだ。空をとんでいるのは、はねのはえたへびみたいだ。頭がプロッコリーの人が歩いている。おしやペリをする花がさいている。それから……。それから……」

見るものすべてが、ヘンテコでとんでもないものはかりだった。
「ほら、もつとよくみるんじゃない。トンデモせかいではもつといろいろなことがあるんじゃないぞ。どんなことでもいいからトンデモせかいを絵にしてごらん。」

ペチャクチャピクチャライドが動く先には、つきつきととんでもないけしきや生きものや、ものがあらわれた。

・・・
でできた山。
ががな家。
が×××××になつたどうぶつや虫。

「あれれ。何だかよく見えなくなってきた。」
ぼくがこまっていると、ぼくのベチャクチャビクチャライドがこたえた。

「トンデモセカイデハ、ミエルコトヲ エニスルノデハアリマセン。ソウゾウシタコトガ、モノヤ、ケシキニナルノデス。ダカラ、ナニガオコツテモ マチガイデハアリマセン。」

「ヤ、ハ、カツテニキメテイイノデス。」

ぼくは、頭の中のできるだけとんでもないことを思いうかべた。するとそれが、トンデモせかいのけしきになっていくのだ。

「よし、このけしきを絵にしていこう。」

ぼくが画用紙にむかった時、遠くの方ででヨンダラ・カイタラの声がした。

「やれやれ、もうちよつといっしょにあそびたかったが、どうやらわしのやく目もおわりそうじゃな…。」

おわり。